

特集

5号館完成 都留国際文学祭開催

新教員紹介 文大に着任するにあたって
夏季休業を利用して学外で学ぶ
教育実習を終えて
講演会だより
文大だより
ぶんだい堂



第62回 桂川祭



5号館の完成

副学長
(兼国際教育学科長) 新保祐司



公立大学法人都留文科大学の5号館の竣工式が、平成29年9月26日に行われました。

この新校舎は、平成29年4月からの国際教育学科の開設に伴って建設されたもので、4月からの新学科スタートには半年遅れましたが、後期の授業から使用できることとなりました。

1階に80人教室が一つ、50人教室が二つ、2階に50人教室が一つ、25人教室が四つ、3階に国際教育学科事務室、研究室、非常勤講師控室、和室などがあります。

5号館は、既存の校舎と同じく赤レンガ調タイルを基調としたデザインとし、東側に隣接する3号館、南側に位置する附属図書館と壁面を揃える

ことで、キャンパス全体としての調和・一体感を高めるように設計されています。

各講義室は、移動可能な机や椅子を配置し、その組合せによって一斉授業やグループ学習、ディベート形式の授業など多様な学習形態に対応できるようにになっています。

各階の廊下に連続したコモンズと呼ばれるエリアは、学生が能動的に学ぶアクティブラーニングの場として様々な家具備品が置かれ、グループワークや自習が行える空間になっています。

各講義室と廊下の間仕切りは、ガラスパーティションを採用し、講義室内の活動が廊下側からも感じられるものとなっています。これは、アクティ

ブラーニングに沿った考えであり、講義室やコモンズといったエリア内で、他の利用者がどのように学習しているのかを見ること・見られることによって、学びの相乗効果が期待できるものです。

講義室の外壁側は、床から天井までのガラス窓を採用し、自然採光や解放感に配慮した明るい講義室空間としています。

3階には、和室を一室設けました。留学生と本学の学生が日本の文化に共に触れる機会に活用するためのものです。部屋の名称は、都留市が俳人松尾芭蕉にゆかりの地であることから、芭蕉の別号である桃青としました。

5号館の2階からの外部通路は、3号館2階及び附属図書館に通じており、5号館と既存建物間の移動の利便性に配慮した造りとなっています。

5号館は、21世紀型の新しい教育を創造し発信するために建設されたもので、国際教育学科のみならず、全学的に活用することで、都留文科大学の今後のますますの発展に大いに寄与するものと期待しています。



1階コモンズ



卒業生の佐藤祐治氏による
絵画の寄贈「海風の村」



定礎版の文字の作者は小島大和さん（比較文化学科3年）です。

都留国際文学祭

一つの音がえし
文学は世界の壁を突き抜ける



英文学科長 中地 幸

都留で初めての国際文学祭が、2017年8月8日、9日の二日間にわたってうぐいす小ホールと3号館ラウンジにて開催されました。この催しは、国文学科および英文学科の有志の教員が企画したのですが、国内外からの一流のゲスト陣、初等教育学科の先生方、国文学科・英文学科の学生有志たちの協力を得て、様々なパフォーマンス、講演、ワークショップで構成される大変贅沢なプログラムとなりました。

8日の前夜祭は、国文学科の加藤敦子先生の司会でうぐいすホールにて行われました。第一部では、言語・国境の壁を越えて国際的に創作活動を展開される作家の多和田葉子氏、田原（ティエン・ユアン）氏、ジェフリー・アングルス氏のポエトリ・リーディングが行われま



ポエトリ・リーディング
(アングルス氏・田原氏・多和田氏)

した。第二部は多和田葉子氏とジャズピアニストの高瀬アキ氏による「北斎—いまを朗読、いまを弾く」という詩と音楽のデュオ・パフォーマンスでした。演目の一つである「登山と下山／うねうね」では、高度経済成長の日本を北斎の描く急な傾斜の富士になぞらえたユニークでユーモラスな詩が朗読されたのが印象的でした。一方高瀬氏の演奏は全身全霊をかけたもので、ジャズのもつ即興力が遺憾なく発揮され、会場を盛り上げました。

9日は福田誠治学長の講演

「いまこそ文学！」から始まり、国文学科の学生を中心とした有志たちが創作した詩を披露し、多和田氏、田原氏、アングルス氏からコメントをいただくワークショップが行われました。その後、詩人のジェフリー・ヘリック氏が、新刊 *Home Om* から英語で詩を朗読なさいました。

午後からは「なりきりシェイクスピア劇場」（英文学科、加藤めぐみ先生 脚色・演出）と題し、英文学科の学生有志たちが『ハムレット』『ロミオとジュリエット』の名場面を英語と日本語で熱演しました。その後、国文学科の田口麻奈先生が司会を務め、多和田氏、田原氏、アングルス氏による「言語の壁を越えての詩作」という対談が行われました。「金子みすゞーことばと音楽」は初等教育学科の先

生方のコラボ・パフォーマンスとなりました。非常勤講師の山本富美先生が十川菜穂先生のピアノ演奏で金子みすゞの詩を歌われました。また藤本恵先生がみすゞの詩の朗読および解説をして下さり、みすゞの詩の「みんなちがって、みんないい」という言葉の解釈を考える貴重な機会となりました。

最後の「異界との往来—幽霊・妖怪・精霊の棲むところ」は学術的なパネルで、国文学科の野口哲也先生による泉鏡花の『高野聖』論、お茶の水大学助教の田中琢三先生によるヨーロッパ文学の精霊論、東北大学教授佐藤弘夫先生による中世及び近世日本における死者・幽霊論が展開されました。文学祭は阿毛久芳副学長の挨拶で終わりましたが、阿毛先生が専門とされる中

原中也のお話が印象的でした。2015年のインドのジャイプール国際文学祭に英文学科の大平栄子先生が国際交流基金のサポートを得て多和田葉子氏をご招待なさって以来、多和田氏は都留文科大学とご縁が結ばれ、現在は国文学科の特任教授でもあります。次回の文学祭には「つるは千年」という題目を下さっています。都留国際文学祭は千年続くのでしょうか。大変嬉しいお言葉です。

なおこの文学祭は、裏方に徹された国文学科の古川裕佳先生、菊池有希先生をはじめ、研

◀ “北斎”
—いまを朗読、いまを弾く
(高瀬アキ氏、多和田葉子氏)



▼ 英文学科学生有志による
シェイクスピア劇



究支援担当、国文・英文学科事務他、大学院生、学部生、Plus One サークルの方々など、表舞台には出て来ない多くの人々の力の集結により可能となりました。また富士急行株式会社様にも協賛をいただきました。ご来場下さった皆様にも心より御礼申し上げます。



多和田氏と国文学科学生有志によるワークショップ



英語が『私の言語』になるには

語学教育センター 准教授 豊嶋 朗子

語学教育センター専任教員として今年度9月に着任しました。それまでの2年半は、秋田県にあります国際教養大学で教職課程を担当していました。しかし、さらにそこからさかのぼること9年前、私はイギリスでの留学を終え、本学の外国語教育センター（語学教育センターの前身）で特別非常勤講師として、センター業務と主に初等教育学科と社会学科の英語の授業を担当しました。これが、私の大学での教授経験のスタートでした。ですので、都留文科大学は私の英語教師としての第2の原点です。その後、本学英文学科の非常勤講師として勤めておりました。

第2の原点ということは、第1の原点があります。それは、大学卒業後6年間の私立高校での英語教諭時代です。そこでの経験が、英語という言語は日本人学習者にとって何なのか、日本という社会的・文化的コンテクストで英語を学ぶにはどのような方法が効果的か、を考えるきっかけとなりました。私自身もその状況で学習してきた日本人英語学習者で、そこから教師になったわけですが、最初に出会った生徒たちが私とほぼ同じ状況で学習していても、彼らにとっていかに英語が「遠い存在」で、自分とは無関係の「別世界の言語」であることを思い知り、自分とのあまりの違いに戸惑いました。そして、国際系の生徒を担当し逆に英語が「近い存在」の生徒にも出会い、日本人学習者が多様で、学習経験・動機・方法が異なることを実感し、私の人生の課題というべき上記の問題に取り組

みたくなりました。そこで高校を退職し、母校の大学の大学院へ戻り修士課程を経て、イギリスのヨーク大学教育学部博士課程で上記の課題を研究し博士号を取得するまでに至りました。

イギリスでは、英語母語話者よりむしろ、それ以外の言語を母語とする学生と接するほうが多く、共有する言語である英語で意思疎通をする、という状況にいました。これはイギリスだから、ということではなく、21世紀になる前後から世界はすでにこのような状況になっていて、英語は英語圏限定の、「別世界の言語」ではなく、異なる言語をもつ人間同士が意思疎通をするために「便利に使える」汎用性の高い言語だということです。つまり、英語は日本人でも「私の言語」の1つに入れておくべきで、ある程度の収入確保のために欠かせないスキルとなっています。本学での職務と並行して、母校が運営する生涯教育機関の英語コースのプログラムディレクターをしていていましたが、そこで、学生時代まで英語が遠い存在だったのに、就職先の会社が突然海外進出を決め、英語力を上げるよういきなり会社から命令を受け困っている方の相談をよく受けました。また、私の前任校の就職率が非常に高いのは英語力と海外留学経験があると思われる。しかし、この現実と、日本の英語教育の実状と、日本人学習者の実態がかみ合わないのも事実で、それを鑑みながら本学でさらに研究・実践にまい進していきたいと考えております。そして、上記の私の「人生の課題」の解決を目指していく所存です。



ヨークミンスター▲

夏季休業を利用して
学外で学ぶ
初等教育学科

見て・知って・考える



初等教育学科教授
中井 均

地学ゼミでは、毎年、地域を変えてゼミ合宿・野外見学を実施しています。今年は、盛夏の沖縄本島を移動しながら、3泊4日（実質2日）の現地見学を行いました。沖縄には卒論指導などで毎年のように来ていますが、見学旅行として各地を廻ると、私自身が今まで気づかなかったさまざまな発見があり、学生にとっただけでなく、教員にとっても有意義な合宿になりました。厳しい暑さの中での見学でしたが、大きなトラブルもなく無事に終了してホッとしています。今後も安全面に配慮しながら、継続的にゼミ合宿・野外見学を続けたいと考えています。



初めての沖縄で学ぶ

初等教育学科3年
高梨 祥樹

私たち自然環境科学専攻の地学ゼミは8月7日～10日にかけて、沖縄へゼミ合宿に行きました。4日間レンタカーを借り、沖縄本島の北から南まで沢山の場所を観察することができました。事前に学習したことを参考にしながら先生方の説明を聞き、更に学習を深めることができました。主な観察場所は、2日目の本部半島の塩川・豊原・今帰仁、3日目の羽地ダム・奥間・辺戸岬・慶佐次・天仁屋、4日目の首里でした。その他にも私の身の回りにはない、沖縄に来たからこそ見ることできる岩石や地層を沢山見ることが

できました。その中でも特に私の印象に残っている場所は、沖縄本島最北端の辺戸岬と、天然記念物に指定されている崎本部の塩川です。辺戸岬では、岬の高台から鹿児島県の与論島を望む素晴らしい景色が見られました。また、岬には日本祖国復帰闘争碑があり、沖縄の辿ってきた歴史というものを考えさせられました。崎本部の塩川では、世界に塩川とプエルトリコにしかない常時塩水の湧く川を見ることができました。私の想像する川というのはまず淡水だったので、塩水の流れる川というのはとても新鮮でした。

地学学習の傍ら、美ら海水族館や今帰仁城跡に行ったりと、観光という面でも楽しみました。タコライスやソーキソバなどの沖縄名物や海鮮丼など地域の美味しい食べ物を食べられたことも良い思い出として残っています。

4日間という短期間ではありましたが、普段の生活の中では見ることのできない地域の学習や、とても濃い体験をすることができました。そして今回の合宿で、地学的自然というものは地域性と強く関わっているものだと強く認識させられました。視野を広げること、様々な場所に赴いて調査を行うことの大切さを再認識させられました。遠く離れた地域との比較をすることによって身近なことに対する学びも深まっていくと思いました。

これらの経験や広がった知見をこれからのゼミに生かしていきたいと思います。



本部半島・塩川での観察



美ら海水族館にて

夏季休業を
利用して
学外で学ぶ

国文学科

edcampムーブメント



国文学科准教授
野中 潤

2010年にアメリカのフィラデルフィアで始まったedcampムーブメント。2014年からのインターナショナルスクールでの3度の開催を経て、2016年9月には日本語による国内初のedcampが鎌倉で開催されました。そのときに運営に関わったのが、夏合宿で鎌倉を訪れていた国語教育学ゼミでした。それ以来わずか1年あまりの間に、都留、東京、大阪、名古屋、横浜、松本、塩尻、彦根、広島…と、edcampは全国各地に広がっています。年末(12/17)には2回目のedcamp都留が文大生有志によって開かれる予定です。ここでは、福島県の飯館中学校(仮設校舎)で開かれたedcamp飯館について、参加したゼミ生に報告してもらいます。



初めてのedcamp

国文学科3年
吉田 蓮

8月9日に、地元・福島県の飯館中学校で開催された「edcamp飯館」に参加しました。会場である飯館中学校は福島県飯館村の学校ですが、福島第1原発事故後に村が避難区域に指定されたため、現在は福島市飯野町の仮設校舎で開校しています。そして来年の4月からは、6年ぶりに村で中学校が開校することが決まっています。希望溢れる未来を持つ学校で行われた参加者自身が教育に関するテーマを出し、好きなテーマのもとに集まって参加者同士で語り合う教育系イベント、edcamp。初めてのedcampは、教職志望の私にとって胸が熱くなるイベントでした。

1回目を選んだテーマは「抱いて眠りたくなる通知表とは？」で、小

学校に勤務されている先生と中学校で国語を教えていらっしゃる先生との3人でトークセッションが始まりました。そんなに嬉しい通知表をもらったことは無いけれど、自分が出会う生徒に渡してあげること国語を、学校を好きになってほしいという思いからこのテーマを選びました。励ましの言葉を書いたとしても生徒に届く前に修正されてしまうこと、どんなに努力している姿を見ても試験で点数を取ってなければ高評価を付けることは難しいことなど、先生方が直面している問題を知りました。先生方と話したことで、見開き1ページの紙を埋める大変さに驚くと同時に、生徒へ深い愛情を持って接していることに感動しました。自分自身は、先生は私達に

愛情を持ってくれている、と感じることは少なかったので、私自身が教員になったら愛情を持って接したいと思っていても出来ないのではないかと感じていました。しかし、そんなことは考えずに生徒と関わっていくべきだと強く思いました。通知表については勿論、生徒のことを心から考えている熱い先生方に出会うことが出来て良かったです。

2回目のトークセッションでは、教育ICTについて現職の先生や大学生、高校生と語り合いました。実際に授業でICTを使っている先生から、学びの範囲を広げられるICTは取り入れた方がよいという意見が出る一方、答えがすぐに分かってしまえば実力に繋がらないという意見も出ました。高校生からは、英語では紙辞書を使う方が様々な知識を得られると聞いたから紙媒体の方がよいと思うという意見が出ました。どの意見にも間違いは無いと思います。だからこそ、どちらも使うということがあって良いのではないかと思います。その時はICTを使うか否かを決めたい方が多く、私もその中の1人だったのですが、それはもう一方の良さを失う堅い考えではないかと思います。もっと柔軟に考え、両方を同時に使うことで良さを引き出せるのではないかと提案が出来ても良かったと感じています。

生徒にたくさんの愛情を注いでいらっしゃる先生方に出会うことができ、非常に有意義な経験をする事ができました。また次にedcampに参加し、教育ICTについて語り合うことがあれば、することの出来なかった提案をしたいと思います。



edcamp 飯館集合写真

夏季休業を
利用して
学外で学ぶ

英文学科

英語圏事情研修引率リポート



英文学科教授
Hamish Gillies

This year's trip was to the UK in September, and fourteen students participated, mainly in their first year of studies at Tsuru. We were based in the historic university city of Oxford. As usual, the two-week schedule consisted of attending English language classes in the mornings and then spending the afternoons on a cultural tour. These tours were mainly in the culturally rich setting of Oxford, but we also enjoyed two day-trips to London. Highlights of these tours were punting on the River Cherwell, visiting Christchurch College's "Harry Potter" dining hall, watching Much Ado About Nothing at the Globe Theatre, and visiting two educational institutions: St. James Senior Girls (High School), and Oxford Brookes University (a Tsuru University Exchange Partner). All in all, it was a very successful trip: despite the short duration the students had a rich variety of learning experiences which should benefit them going forward.



英語圏事情研修に参加して

英文学科2年
渡邊 佑衣

私は夏季の英語圏事情研修に参加し、イギリスに約二週間滞在しました。今回の研修ではオックスフォードでのホームステイに加え、現地の語学学校に通い、週末にはロンドン観光をするなど充実した内容でした。

Oxford international school という語学学校に平日は通い、レベルごとに分けられたクラスで英語を学びました。私はIELTSのクラスに入り、問題の解き方などを学びました。クラスには様々な国の学生がおり、そのような環境の

中で、他国の文化や習慣を英語でのコミュニケーションを通して知ることができ、改めて国際語としての英語を体感することができました。授業を受けたあとは毎日午後のアクティビティがあり、街の散策やオックスフォード大学の施設や美術館等を訪れました。午後のアクティビティの中で、クライストチャーチなどの有名な場所を訪れ、日本との文化の違いを目の当たりにすることができました。

ホームステイでは多くの貴重な体験をしました。ホストチルド

レンと一緒に遊んだり、週末のショッピングに行ったりする中で、日常会話だけではなく、彼らの価値観や生活を知ることができました。食生活や生活習慣において初めは慣れないことも多い生活でしたが、慣れていくと同時に彼らの文化を理解することができたと思います。

今回の英語圏事情研修ではロンドンの高校にお邪魔させていただき、授業に参加することが出来ました。日本の教育システムとは異なり、少人数クラスの授業が多くきめ細やかな指導が行われていました。また生徒が視覚的、聴覚的に理解できるよう、インターネットが有効的に使用されており、日本の高校の授業との違いに驚きました。何より生徒の発言を尊重するという雰囲気の中で勉強をしているので、生徒がより主体的に授業に参加しており、学ぶ環境づくりの大切さを考えさせられました。

今回の英語圏事情研修を通して文化や価値観の違いを目の当たりにし、改めて日本の良い部分と悪い部分を見つめ直すことができました。また将来教員になるにあたり、何が自分に足りていないかを考えるきっかけとなりました。この二週間の経験を今後の英語学習に役立てるとともに、広い視野で物事を捉えられる人間になれるよう、努力していきたいと思います。



留学先の風景

夏季休業を
利用して
学外で学ぶ

社会学科



社会学科准教授
両角政彦

地域で予察・考察する力をはぐくむ

「フィールドワークⅥ」では、「地方都市における地域経済の構造変動」をテーマとして、2017年8月22日から25日まで岡山・倉敷で現地調査を実施しました。参加学生11名は、前期に農業・農村、工業・都市、商業・観光の各班に分かれ、目的設定と情報収集、調査協力依頼等の事前準備を行ってきました。フィールドワークでは、農業者、農業団体、酒造会社、織物企業、鉄鋼企業、小売店舗、観光地、県・市町村役場、財団法人などで、ヒアリングやアンケートを行い、日本有数の工業地域の経済社会を幅広く学びました。地域の方々に多大なご支援をいただきながら、学生は積極的に取り組み、無事終わることができました。この成果は『調査報告書』にまとめ、現地へ報告することになります。



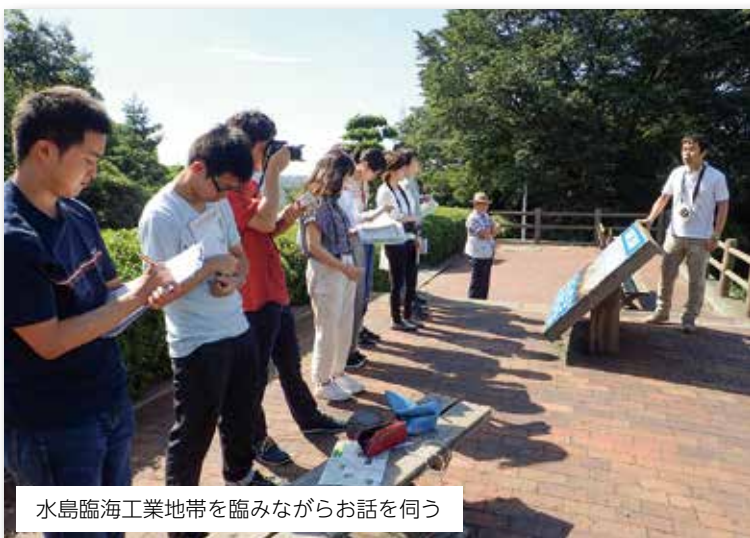
学外で学ぶ

社会学科3年
齋藤 倅 綺

8月22日から25日にかけて、私たちは岡山県倉敷市を中心に地域経済に関する現地調査を行ないました。大きく第一次産業、第二次産業、第三次産業に調査内容を分け、そこから学生それぞれが研究テーマを持ち調査しました。

初日は午後倉敷駅に着いたのち、全員で重要伝統的建造物群保存地区の倉敷美観地区に向かい街並みの観察などをし、その後は学

生それぞれで資料収集などを行ないました。2日目はそれぞれの研究テーマにしたがって個人あるいはグループで事前にアポイントを取っていた場所や調査予定地に向かい、聞き取り調査、アンケート調査、現地資料の収集を行ないました。3日目はバスで全体行動をし、午前中はみずしま財団と倉敷市環境リサイクル局の方に水島地区の見学や公害、環境政策のお話を伺い、午後はJFEスチール西



水島臨海工業地帯を臨みながらお話を伺う

日本製鉄所倉敷地区の工場見学、ふなおワイナリーの見学などを行ないました。最終日は2日目と同様に主に聞き取り調査を行なったのち、それぞれ帰路に就きました。

私はこの4日間によって多くの学びを得ることができました。特に、聞き取り調査に関しては初めての経験だったので、どのような質問をしたら自分の聞きたいことが聞けるか、聞いたことを漏らさずにメモを取れるかなどの不安等もありました。しかし、現地の方々の支えもあり現地でない知りえないお話をいただくことができました。私の場合は岡山県の繊維産業を研究テーマにしており、その中でもジーンズ産業について調べていました。2日目の聞き取り調査の際には藍染めした製品を販売している店舗に突然お邪魔したにもかかわらず、岡山県における藍染めの歴史や繊維産業の発展の歴史などのお話をしていただき、さらに近隣のデニム生地加工工場の方が知り合いということで、その様子まで見せていただくことができました。これらによって、当初予定していたよりも深い知識と多くの情報をいただくことができました。

今回のフィールドワークでは多くの方にお世話になりました。この場をお借りして感謝の意を表します。

夏季休業を
利用して
学外で学ぶ

比較文化学科



比較文化学科准教授
佐藤 裕

インドの社会・文化変容を理解する

2016年度「スタディ・ツアーⅡ」では、インドの社会変動や文化変容を現場から理解することを目的に、南インドのカルナータカ州を中心に1週間滞在しました。まず、本ツアーの企画面で協力を得たマイラ経営大学では学生との交流や社会科学者たちによる講演、そしてインド有数のIT企業であるインフォシスの視察の機会に恵まれました。つぎに、インド人類学調査局の協力のもと、若年貧困層が就業訓練を受ける有機農法のNGO、湾岸諸国への移住と送金で支えられるプランテーションとそこで農業労働者として働く先住民の村やNGO、独立後の開発政策で変容を遂げた山岳民族の村々、複数カースト集団から構成され、インド社会学の古典的な調査がなされた村を訪問しました。インドでの滞在は不便さがつきものですが、だからこそ大きな学びの場になったことでしょう。



学外で学ぶ

比較文化学科4年
尾形はづき

2016年8月30日から9月6日にインドにおける社会と文化を理解するという目的のもとスタディ・ツアーでインドを訪れた。私は初めてのインド訪問であったため訪問前は不安であった一方で、書籍やインターネットから得た情報から想像するしかなかった国に行くことがとても楽しみであった。

インドでは2002年の憲法改正および2009年の無償義務教育権法によって6歳から14歳の子どもに対して初等教育の義務化と無償化が図られている。しかしながら、世界レベルの優秀な人材が輩出されている一方で、

教育さえ受けることのできない子どもも多く存在する。教育を受けることの困難は、現地の社会学者が運営するカルナータカ州南部のブナルチス学習センターを訪問し、有機農法を学ぶ若者たちと交流した際にも、またタミル・ナドゥ州にある先住民のための学校を訪問し、山岳地帯に住む子どもたちと交流した際にも実感した。学習センターや学校の先生方は子どもが学校に通えるよう、労働力として期待されているために学校に通うことのできない子どもの家庭へ授業料を徴収するのではなく現金を支給したり、筆記用具や通学パッ

グを支給したりとさまざまな支援が行われていた。授業料を貰うのではなく現金を支給しているという事実にとっても驚いた。

インドは歴史的にも、文化的にもとても魅力的な国であった。毎食のように食べたカレーの風味の違いを探すこともまたとても楽しかった。お世話になったマイラ経営大学の先生方やインド人類学調査局のサットヤナラヤナン博士、バスの運転手の方をはじめ、インドの人々の親切で明るく、ユーモアのある人柄にとっても惹かれた。百聞は一見にしかず、とよく言うがたしかにその通りであると今回のツアーを通して実感した。日本人はインドに対して消極的なイメージを抱いていることが多い。私もツアー前に両親や多くの友人に心配された。しかし実際にインドを訪れると、想像以上にインドという国が好きになった。今後、インドの食生活や宗教観についても詳しく学んでいきたい。

カルナータカ州南部のブナルチス学習センターにて



タミル・ナドゥ州にある先住民のための学校にて



夏季休業を
利用して
学外で学ぶ

国際教育学科

真の異文化、国際的文化理解とは



国際教育学科教授
森川 鈴子

国際教育学科では一期生を迎え、手段としての英語を使って、いかに世界に通用する国際的な視野の育成ができるか、という課題を常に意識しています。この夏の新井さんの海外インターンの経験は、異文化を理解するにあたっての重要な要素である主体性、積極性を培う、という当科の目標に一步近づいたものであったと思います。自国、そして自分自身をよく理解し、さらに物事を多角的に分析しながら、あらゆることに積極的に心を開くことこそ、学びを拓いていく一步であり、今後も好奇心と挑戦心を持って真の国際的な文化の理解を深めて行ってくれるものと期待しています。新井さんの様々な意味でのこの夏の「学び」が、同輩、後輩に良い刺激を与えてくれることを願っています。



海外インターン武者修行 プログラムを通して

国際教育学科 1年
新井 さくら

この夏、私は大学生になり、新しいことに挑戦してみたいと考え、海外インターン武者修行プログラムに参加しました。このプログラムは、日本全国の大学生がベトナムに集まり、2週間かけてビジネスプランを企画し、新サービスを作り上げます。学んだことは数え切れないほどありますが、特に影響を与えてくれた学びについて振り返ります。

一つ目は、英語の活用です。私はレストランで西洋人の観光客を対象とした新商品を開発しました。そのために、街頭調査、マ

ネージャーとの交渉、オーナーへのプレゼンなど全てを英語で行う必要がありました。日本人だからと言って配慮をしてくれない人々の中で、思いが伝わらないなど多くの壁がありましたが、自分たちの企画の良さを伝えたいという強い思いから、ジェスチャーを使ったり、言い回しを変えたりしながらあきらめずに頑張りました。仕事をする上で求められる英語力の高さを実感し、今後の英語の学習へのモチベーションに繋がりました。

二つ目は、苦手な領域に踏み込

む勇氣を持つことです。プレゼンテーションをすること、仲間と向き合い本音を言い合うこと、主体的に動くことなど、今までは失敗したくない気持ちや、周りの人からどう思われるのかを気にして避けていましたが、このプログラムでは企画の採用という共通目標のために、苦手なことにも飛び込んでいくことができました。自分に自信がなく、一線を越えるまでに多くの葛藤があり、上手くいかなかったときはたくさん悩みましたが、その一步を踏み出したことから、やってみなければ何も始まらないことや、失敗から学んで改善していけばいいのだということに気づくことができました。

私はこのインターンに参加してし、新しい自分や自分の可能性に気づくことができました。それらの気づきを忘れずに、大学生活でたくさんのことを経験して成長していきたいと思います。



集合写真



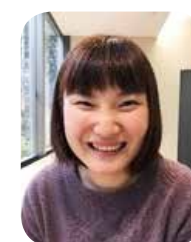
実際に企画した商品

私は9月6日から29日まで、母校である富山県南砺市立福光南部小学校で教育実習をさせていただきました。実習が始まる前は、楽しみであると同時に緊張や不安もありました。しかし、実習はあっという間に終わってしまい、私にとってとても貴重で充実した約1ヶ月間となりました。

私は6年生19人の子どもたちと毎日を過ごしました。私は体を動かすことが好きなので、それを生かして子どもたちとたくさん関わろうと実習前に決めていました。授業間に行われる3分間走で子どもたちと一緒にグラウンドを走ったり、昼休みにサッカーやドッジボール、Sケンなどをして遊んだりしました。いつの間にか6年生だけではなく、他学年の子どもたちとも一緒に楽しく体を動かし、様々な子どもたちと関わる事ができました。

実習校では、実習2日目から毎日1回ずつ、合計15回授業をさせていただきました。15回の授

業で、45分の授業をつくる大変さ、子どもたちに伝えたいことを伝える難しさを実感しました。そして、ほぼ全教科の授業をさせていただき、教科によって授業の仕方や教材の工夫も変わってくることを学びました。毎日授業をさせていただいた中で、私の大きな課題は「発問のしかた」でした。子どもたちが今何を考えるのか、何を答えるのかを明確にして、端的に発問をすることが大事だということを先生方に教えていただきました。うまくいかず悩んだこともありましたが、毎日授業をさせていただくことで、どのような発問が子どもたちにとって分かりやすく、考えるきっかけとなるかということが少しずつ掴めるようになりました。そして、子どもたちが授業後に書くノートを読み、私が伝えなかったことがしっかりと伝わっていることが分かったときや、連絡帳に「先生の授業が楽しくて分かりやすかった」と書いてあるのを読んだときに、とても嬉しかったのを覚えて



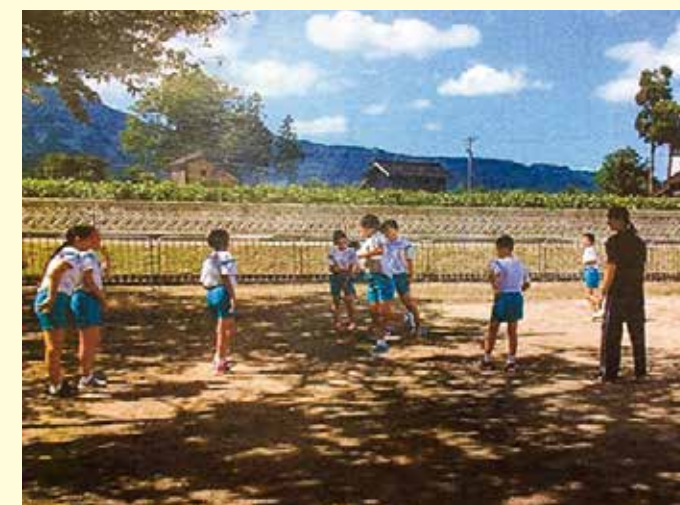
教育実習を終えて

初等教育学科 3年 中川 真希

います。

また、全先生方の授業を参観させていただき、ご指導もいただきました。学年によって話し方、声かけ、指導するうえでの注意点などの違いがあることが分かり、それぞれの先生方の授業スタイルや先生方のカラーというものも大事であることを感じました。先生方から教わったことを自分の授業で生かしたり、真似をしたりしながら経験を積むことができました。

17日間の教育実習で、私は多くのことを学び、経験させていただきました。元気で明るい子どもたち、お忙しい中たくさんご指導いただいた先生方、声をかけて励ましてくださった職員の方に感謝の気持ちでいっぱいです。この気持ちを忘れず、教師になることを目指して残りの大学生活を悔いのないように過ごしていきます。



休み時間の様子

「先生達は、どうして授業にパソコンやプロジェクターを使うようになったの？」これは、とある生徒からもらった質問です。様々な意見が出ると思います。「便利だから」や「楽しく学べるから」など。因みに私はそのとき、答えに詰まってしまいました。まさに授業を始めようと、丸めていたスクリーンを黒板に貼る途中でしたから、尚更情けなかったなと思います。そうしたことから教育実習中、私はこの生徒からもらったとても大きな宿題について考えることになりました。

私は教育実習を「群馬県立館林高等学校」でさせていただきました。伝統のある男子校です。私はかつての通学路を通り、三週間母校の門をくぐりました。季節は、手紙を書くなら「入梅の候」、ですが館林市は既に真夏のように暑く、正門前の28本の桜並木は互いに青々とした葉を影にして、降り注ぐ直射日光に耐えているようでした。私は学生服ではなく、スーツにネクタイをして、この懐かしい景色を見ました。それは私をむず痒いような気持ちにさせるのと同時に、先生として務める自覚を感じさせました。

しかし私の教育現場に対する目線は、まだまだ学生服



プロジェクターを使った古典の授業の様子

を着ていたようなものでした。教育現場は既に驚くほど、ICT化が進んでおり、先生方は各々プロジェクターを使って、画像や映像教材、パワーポイント等を取り入れた授業づくりを実践されていたのです。私は恥ずかしながら、そういったものを大学で学びつつも、まだ遠い未来の出来事だと思っていたのです。さながら浦島太郎のような衝撃を受けた私は、使い古した筆箱の中から、身に覚えのない新



教育実習を終えて

国文学科4年 茂木直輝

しい文房具を見つけ、それを使わなければならないような状況にいることを感じさせられたのです。私は必死についていくと決意し、授業づくりに勤しみました。そして、私が授業をすることになってから数回目、スクリーンを黒板に貼るその時に、とある生徒が声をかけてきたのです。

「ドリルを買った人が欲しかったのはドリルではなく穴である」これは、アメリカのマーケティング学者セオドア・レビット氏が自身の著書「マーケティング発想法」の冒頭で紹介している格言です。商品売るには売り手の都合ではなく買い手にとっての価値から考えるべきだということを示唆した言葉です。教師と生徒は売り手と買い手ではありませんが、授業づくりを考える一つの言葉として、とてもいいものだとは私は考えています。私は授業を始めたばかりのとき、ICTを取り入れることばかりを考えて、その先を考えず、生徒に授業を押し付けてしまったのです。つまりそれは生徒の教育ニーズに応えた授業とは言えません。ICT機器というドリルを使ったその先に、対話的な学びや発展した議論を必要としているのです。もちろん読むことや書くことが苦手な生徒たちへの新たなアプローチとしての機能も果たします。

私は実習中、母校の図書館で出会った本の登場人物に宿題のヒントをもらいました。とても不思議な雰囲気の小さ

な「星の王子様」からです。その子の言葉を紹介したいと思います。

「じゃあ秘密を教えるよ。とてもかんたんなことだ。ものごとはね、心で見なくてはよく見えない。いちばんたいせつなことは、目に見えない。」

私は「いちばんたいせつなこと」を探しました。国語の授業の中で。すると、あることに気が付きました。またその根底にはICT機器の存在がありました。板書する時間をあらかじめ作っておいたパワーポイントに補助してもらう。すると、生徒が発問できる時間、機会が増え、より多く意見を出し合える。また生徒の顔を見て発言を聞くことが出来る。画像や映像を使い生徒の理解を補助すると、発言をためらっていた生徒が、積極的に話し合いに参加する。ICT機器の利用からコミュニケーションや主体性など「目に見えないもの」が得られることに気が付いたのです。

「教育実習を終えて」の題で書き始めたこの文章は、自分にとって、生徒からもらった宿題の中間報告に過ぎません。とても難儀な、しかし貴重なこの宿題は、自分が教員になってからも、時々机から引っ張り出してきては考えなければなりません。私にとって教育実習は、ターンテーブルに針を落とすきっかけをくれたような貴重な体験でした。

私は5月下旬から3週間、母校である栃木県立矢板東高等学校にて教育実習をさせていただきました。それまでは大学において教育についての知識を学んでいましたが、実習を通し、実際に自分なりに組み立てた授業を行い、また直接生徒たちと関わることで、本当にたくさんの貴重な経験を得ることができました。私は早くも実習3日目から朝のホームルームや英語の授業を担当し始めました。最初は教壇に教師として立つことに緊張や不安もありましたが、生徒たちが温かく受け入れてくれたおかげで、緊張も和らぎ自分らしく生徒たちと向き合うことができたと思っています。

大学での模擬授業とは全く異なり、実習で実際に授業を行うことは本当に大変でした。様々なことを考慮しながら指導案を練り、事前に授業準備を行っていても、実際に生徒たちを前に授業を行うと、計画通りに上手く授業が進むことはほとんどありませんでした。生徒からの予想外の返答が

あったり、時間配分のズレが生じたり、教師としての臨機応変さや柔軟性が重要であることを改めて実感しました。

今回、研究授業では、All Englishでの授業に挑戦しました。生徒たちにとってもAll Englishでの授業は初めてであり、それは私だけでなく生徒たちにとっても挑戦でした。All Englishの授業に臨むにあたり、生徒たちに英語のみの授業を負担に感じさせないこと、そして生徒たちから積極的に英語を話す意欲を高めるきっかけをつくることを目標に取り組みしました。振り返ってみると、英語のレベルが異なる40人の生徒たちに対し英語のみで授業を行うことは、準備の時点でも授業の進行でも、普段の授業より留意しなければならなかったことが多く、授業後の反省点・改善点もたくさんありました。しかし、「授業が楽しかった」「もっと英語を話せるようになりたい」など生徒からのフィードバックを読んで、改めて挑戦して



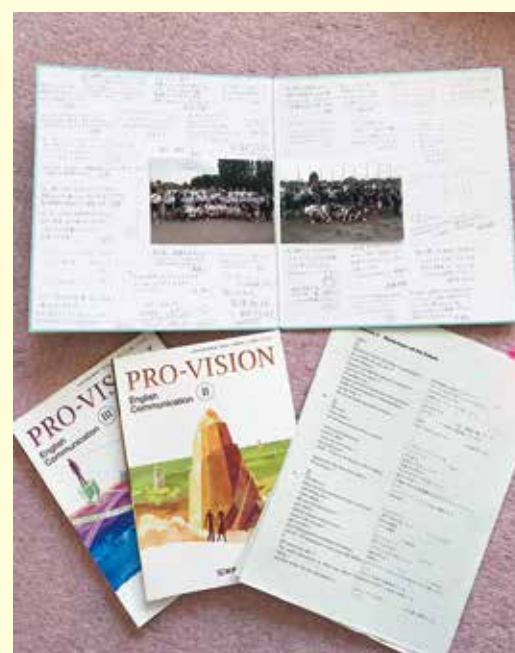
教育実習を終えて

英文学科4年 臼井佑実

良かったなあとと思いました。

3週間の教育実習を通し、教師を目指すにあたっての自分自身の未熟さ、英語指導でも生活指導においても課題がたくさんあることを実感しました。実習中は失敗したこと、思うようにいかず悔しい思いをしたこともありましたが、指導教官の先生や他の先生方、また生徒たちの協力を得て、本当に充実した3週間を過ごすことができました。また今回の実習で“教師”という仕事の大変さや難しさを身をもって体験しました。しかしそれ以上に、自分の努力に対して生徒たちも応えてくれるという手ごたえを得て、とてもやりがいを感じました。そして何よりもこの実習を通して「教師になりたい」という気持ちがより一層強くなり、教員採用試験へのモチベーションになりました。

来年の春からは正式な教員として教壇に立ちます。この教育実習で得た経験を生かし、“生徒たちから学び、常に成長し続ける姿勢”を忘れずに日々努力していきたいと思っています。



生徒たちからの色紙と授業の教材

8月21日から9月15日までの4週間、出身校である函館市立深堀中学校にて、教育実習をさせていただきました。この4週間の中で、本当に多くのことを学ぶことができました。

まず、授業についてです。実習中は授業の観察や実践の時間を、たくさんいただくことができました。前半の2週間は主に授業観察をさせていただきました。実習生という立場で授業を観てみると、先生方は様々な工夫をされているということがよくわかりました。特に、生徒に対する細かな指示や声かけなどは、参考になることばかりでした。また、すべての先生の授業を観に行くつもりで、担当教科だけではなく、他の科目の見学も多くさせていただきました。その結果、それぞれの先生の良い点をたくさん吸収することができ、自分の授業の参考とすることができました。

また、後半の2週間は、1年生の地理の授業実践を6回と、3年生の公民の授業実践を2回、行いま

した。授業については指導教諭から「生徒の発言を中心に授業を作れると良い」というアドバイスをいただき、それを実現できるよう、授業準備に取り組みました。しかし、実際にやってみると、授業というものは本当に難しく、反省点だらけの日々となっていました。特に、生徒の発言は予想外であることの方が多く、発問の難しさや発言への対応などには、大変に悩まされました。そのなかで「生徒の発言を中心とする授業」というのは、本当に難しいものでした。結果として、このアドバイスを達成することができた場面は少なく、反省材料として残りました。しかしながら、指導教諭に遅くまで付き合っていたいただきながら授業準備に取り組み、結果的に生徒に「面白い」と言ってもらえる授業ができたことは、大きな励みとなりました。

次に、クラスについてです。私が担当させていた1年B組は、控えめでおとなしい生徒が多いクラスでした。そのため、最初は上手にコミュニ



教育実習を終えて

社会学科3年 青田 遼平

ケーションがとれずに、落ち込むこともありましたが、指導教諭から初日にいただいた「雨垂れ石を穿つ」という言葉を信じ、生徒の中に隠せずに入っていくことにしました。その結果、おとなしく控えめながらも、生徒たちが少しずつ心を開いてきているという手応えを感じられるようになりました。そして最終日には、嬉しい言葉をかけてくれる生徒や、別れを惜しんでくれる生徒もいました。この時は、自分なりに一生懸命に取り組んだことに対し、生徒たちが応えてくれたような気がして、素直に嬉しかったです。

今回の実習を通して、教師という職業の魅力と難しさについて、改めて考え直すことができました。また、実際に現場に立つ上での課題も見えてきたので、今後さらに成長できるよう、精進していきたいと思ひます。



授業中の様子

講演会だより



2017年国語国文学会主催講演会

『遊びと日本人 — 上代文学と芸能 —』

開催：2017年6月21日(水)

講演者：藤原茂樹氏

今年度の春季講演会は、慶應義塾大学名誉教授の藤原茂樹氏をお招きし、「遊びと日本人—上代文学と芸能—」と題してのご講演をいただいた。多くの資料が挙げられ、縦横無尽に日本の文学と文化が語られたご講演は、藤原氏のこのテーマにかける情熱が感じられるものであった。

「遊び」は単なる「遊戯」を指すのではなく、豊かな広がりを持つ言葉として捉えられなければならない。これは「まつり」や「鎮魂」など神と人とのつながりに芸能(遊び)のはじまりを見ている折口信夫の学問を継承し、発展させた藤原氏だからこそ言える言葉である。氏は続けて、家持と池主の贈答歌(巻17・三九九一番歌、巻19・四一八九番歌)を例に、万葉人の遊びを通した心の交流を語ってくださった。これは自分の行なった遊びを相手に伝えることで、相手を喜ばせる、「魂を揺らす」という遊びの本質を示している。

「つながる」ということは遊びにおいて大切な要素である。今回のご講演では「つながる」ということが万葉人の心の交流として語られていたと思う。

藤原氏のご講演は「文学」という

枠組みを超えて、上代の豊かさを語るものであり、映像資料を交えるなど体験を重視したものであった。当日は国文学科の学生以外にも多くの方が来場し、中には外国の方の姿も見られた。「遊び」という人間にとって大切なテーマをそれぞれの関心に応じて深め、共有することのできた有意義な講演会であった。

藤原氏のご講演を拝聴して個人的に考えたことは、縄文・弥生時代の出土品からも遊びの要素を伺うことができるのではないかとことである。勝手野古墳群(兵庫県)出土の装飾付須恵器には、馬に乗る男性、

狩りの様子、男性二人が相撲をしている様子などが十一体の小像により表現されている。清水風遺跡(奈良県)、坪井遺跡(奈良県)からは鳥装の人物が描かれた土器片が出土している。東京国立博物館蔵の銅鐸(国宝)には狩りや農耕の様子が描かれている。これらの出土品には、生活の中の遊びが描かれていると言えるのではないかと。文字を持たない時代においても、人々は遊びを通して豊かなつながりを生み出し生活をしていったと思われる。

(文学研究科 国文学専攻1年 長谷川 豊輝)

講師紹介

藤原茂樹(ふじわら しげき)

1951年生まれ。慶應義塾大学大学院博士課程修了。慶應義塾大学名誉教授。

専門は、上代文学・芸能史。上代文学会常任理事、古事記学会理事。著書に、『万葉から万葉へ—万葉びとの言葉とところ—』(共著、NHK出版)、『藤原流万葉集の歩き方』(NHK出版)、『池田彌三郎の学問とその後』(慶應義塾大学出版会)、『催馬楽研究』(編著、笠間書院)など。NHK番組「日めくり万葉集」に壇ふみさんとともに出演。





2017年度英文学会前期講演会

『海外危険学講座』

— 初めての海外、なにがヤバイかわからなくなる前に知っておこう！ —

開催：2017年7月4日(火)
講演者：丸山ゴンザレス氏

テレビ番組「クレイジージャーニー」(TBS 深夜)でお馴染みの丸山ゴンザレスさんをお迎えして、海外の危険な地域や裏社会の現状をお話いただきました。世界へ旅立つ多くの学生たちの疑問に答えるように、テレビや雑誌で取り上げられなかった秘話や秘蔵写真までもご披露いただきました。

海外のあちこちで身の「危険」に遭遇し、何が「危険」なのかを捉え直しているゴンザレスさんは、「危険」は、「場所」ではなく、出会う「人」にあるといいます。世界に無作為で人殺しがあるような「絶対に危険」という地域は多くはなく、自ら「危ない人たちに触れなければ、ある程度は安全に観光地巡りができている」とのこと。一方、海外での「危険かどうか」は、ケース・バイ・ケースが多過ぎるため、「様々な統計やリサーチを読み取り、ケース・スタディーを集めて自分で判断をする力をつけることが大切」と説かれました。

そのケース・スタディーとして、ご自身で撮影された沢山の写真を映しながら、メキシコの麻薬戦争地域、ギリシャのアテネのシリア難民、米国オレゴン州の雪男探索、そしてハワイのホームレス地域など、現地でしか得られない体験談を聴かせてくださいました。日頃、メディアを通して知る遠い世界のニュースが、真に迫って感じられるようでした。

ゴンザレスさんにとっては、強盗や恐喝が日常茶飯事の海外で多少の被害にあっても、無事に日本に帰国できれば、それはトラブルではありません。お金や物への執着は強盗に対する危機意識を阻

害し、トラブルに巻き込まれかねません。覚悟とあきらめの発想の転換が必要なることを学びました。

帰国するタイミングを失い異国の地でホームレスになっている方もいるようです。最後にゴンザレスさんから心に残るメッセージをいただきました。「海外に出ていくときは、皆さん、忘れないでほしい — 帰ってくるまでが旅」

「帰国さえできれば無事」、そうでなければゴンザレスさんにとっては何かかも「危険」なのでしょう。今後も危険地帯へ取材活動に赴かれるゴンザレスさんへ敬意をこめて、ご無事をお祈りいたします。

(英文学科2年 長谷部 夏江)

～ 危険回避 3つの秘訣 ～

- ①治安の悪い地域では目的地に向かってスタスタと一目散に歩くようにすると面倒な人に話しかけられないのでトラブルに発展する確率が下がる。
- ②廃墟や建築途中で放置されている建物には、ホームレスが勝手に住み着いたり、薬物利用者がいたりするため近寄らない。
- ③日本国内における違法品に対しても知識を持っておく。例えば、旅先で先輩旅行者などが通過儀礼だとして勧めてくるマリファナは「知っているからいらない」ときっぱりと断る。

おまけ…海外では携帯灰皿は手に入りづらい。
喫煙者は携帯灰皿を使うと環境保護団体の人かと一目置かれる。

講師紹介



丸山ゴンザレス氏

宮城県出身。ジャーナリスト、編集者、國學院大学学術資料センター共同研究員
TBS 「クレイジージャーニー」出演
著書 『世界の混沌<カオス>を歩く ダークツーリスト』(講談社)
連載 『漫画ゴラク』(日本文芸社)で「ワルい地球の歩き方」
他、多数



福祉国家論講演会

『フィンランドから見る北欧福祉国家の今』
— 失業率の上昇と不平等の進行 —

開催：2017年5月31日(水) 講演者：ヘイッキ・エルヴァスティ博士 (Heikki Ervasti Ph.D)

北欧フィンランドのトゥルク大学からエルヴァスティ氏をお招きし、1. 経済不況、2. 福祉改革、3. 総括という3部構成で、英語から日本語への通訳を交えながら60分間の講演が行われた。

2008年の世界金融危機の影響で北欧諸国は経済状況が悪化し、特にフィンランドは深刻な経済不況に陥った。そして、フィンランドでは失業や低就労率が問題となり、同時に政権交代もあったため、福祉改革に影響を与えた。この福祉改革には、市場原理の拡大と公的セクターの縮小という2つの重要な点がある。北欧型福祉国家については変化を伴うかもしれないが、存続するとエルヴァスティ氏は見解を示し、以下のように講演を進めた。

まず、1. 経済不況についてである。フィンランドでは、ノキアが情報通信技術で長年にわたり高成長を遂げて好景気であったが、2008年以降ノキアは衰退し、森林産業製品の需要も大きく減少した。当然ながら経済不況は社会政策に影響を与え、社会保障制度は危機に陥り、失業率の増加に直結した。

次に2. 福祉改革である。社会や医療のケア改革は、フィンランドにおける過去40年のなかで最大級の改革であるといわれている。北欧福祉国家の大きな特徴は、公的サービスである。改革では公的サービスの縮小が主であるといわれているが、これは必ずしもサービスの民営化を意味しているのではなく、むしろ市場が民間企業に開か

れるということである。依然として公的責任は残っており、伝統的な北欧型福祉国家の原則に反するというわけではない。この改革に対しては、いずれにせよコストが上昇して不平等が進行するという批判もある。

フィンランドは現在ベーシックインカムの実験中である。失業者2000人が無作為に選出され、全員が毎月560ユーロを受け取っている。ベーシックインカムは非課税であり、就職しても減額されないため、給料と同時に受け取ることができる。背景として、就職は公的手当の減少を招くので、失業者にとって必ずしも利益がないという現状がある。社会保障制度を簡素化できるか、就職する動機づけを高められるかをみるのが実験の狙いで、2019年まで続けられる。

最後に3. 総括である。変化を伴い

ながらも北欧モデルは存続するとエルヴァスティ氏は述べつつ、多くの社会政策の専門家が、改革は自由主義市場の拡大や不平等の進行、伝統的北欧モデルの弱体化を招くのではないかと懸念を示していることも紹介していた。多くのことは経済に起因するため、経済がまた軌道に乗って失業率が低下すれば、改革はあまり劇的なものにはならないだろうとエルヴァスティ氏は述べ、講演を締めくくった。

講演後には30分間の質疑応答の時間が設けられ、聴講者の質問にエルヴァスティ氏は丁寧に答えてくださった。今回の講演会では、失業率や不平等、経済不況といった日本にも通じるものやベーシックインカムが扱われ、日本の将来を考える手がかりを聴講者に与えてくれた。

(社会学科3年 菅野 快)

講師紹介

ヘイッキ・エルヴァスティ博士
(Heikki Ervasti Ph.D)

トゥルク大学社会科学部教授。社会学や社会政策分析を背景に、欧州の社会制度に対する意見や行動、関心についての多方面にわたる調査事業であるEuropean Social Surveyをフィンランドで行い、福祉国家の再編における労働市場の変化の影響についても調査している。

○著書

Ervasti, Heikki (et.al) (ed.), *The future of the welfare state : social policy attitudes and social capital in Europe*, Edward Elgar, 2012



2017年度後期比較文化学会主催講演会

『恋愛の“普通”は誰が決めるのか』

開催：2017年7月14日(金) 講演者：牧村朝子氏

「レズビアンタレント」最初はそのから牧村さんに興味を持ったが、「私はレズビアンさんじゃない」「他のレズビアンのことは分からない。話せるのは自分のこと」といわれ、浅はかであった自分の考えを講演会当日に省みさせられた。

牧村さんは当日、スライドを用いながら、自身の実体験や様々な女性同士の関係・同性愛の迫害の歴史などを通して、テーマである恋愛観から、人々の同性愛への偏ったイメージ、LGBT社会運動に対する姿勢の違和感などを語られた。割合や数を説明する講義とは違い、実際の体験や行為・人々の話をコミカルに語る本講演会は、遠いものと感じていた同性愛を身近に感じさせた。

せた。

牧村さんの経験談では、初恋を通して女性を愛する自分と周りとのギャップに苦しみ、性同一性障害として男性になることを目指したり、男性と交際したりして自分を模索していたことを聞いた。転機は「中央線レズビアンオフ会」。想像していたレズビアンとは違う、普通の女の子たちとの出会いで自分の気持ちを認めることができたのだという。好きになる人が女性だった。ただそれだけのことで、人を愛する気持ちには変わらないし、非難されるいわれはないはずなのだ。

そもそも日本の歴史をさかのぼっても女性の同性愛は存在し、許容されていた。江戸時代のといちはいちと呼ば

れる性行為、明治時代のエスと呼ばれる女学生の先輩後輩関係など、必ずしもそれは嫌悪されるものや新しいものではなかった。恋愛観も時代とともに変化してきており、恋愛に普遍的に正しい形はない。

歴史上では、しばしば同性愛の人々に対して迫害が起こってきたが、これは性的指向に関係なくただの人権侵害である。そもそもLGBTとアライ(LGBTフレンドリーなストレートの人)とその他に分けて考えること自体完全には不可能であるし、対立であると牧村さんは話す。

学会事務局員を含め50人近くの学生と先生方が講演を聞き、講演会後の質疑応答・懇親会も積極的な姿勢を見せていた。

今回の講演会を通して、ジェンダー以前に、他人に対して一人の人間として向き合うことが大切であるということに改めて確認することができた。参加者が新たな視点を得られるような会の企画など、今後にも有意義な学会活動を行っていききたい。ご来場いただいた皆さま、講師の牧村さん、その他本講演会にかかわってくださった方々に深く御礼申し上げます。

(比較文化学科2年 清水 綾子)

講師紹介



牧村朝子 (まきむら あさこ)

タレント、文筆家。2010年、ミス日本ファイナリストを機に芸能界デビュー。2012年渡仏、フランスやアメリカでの取材を重ねる。2017年独立。現在は日本を拠点とし、執筆・メディア出演・講演を続けている。夢は「幸せそうな女の子カップルに“レズビアンって何？”って言われること」。出演「ハートネットTV」(NHK総合)ほか、著書『百合のリアル』(星海社新書/2017年、小学館より増刷版刊行)『ゲイカップルに萌えたら迷惑ですか?』(イースト・プレス)ほか。ツイッター@makimuuuuu(まきむら)



2017年度国際教育学科講演会

『Nordic Outdoor Education & Didactics』

開催：2017年1月20日(金)
講演者：Tina Noregren 氏

Learning about education is not only for students who want to be teachers, because education is fundamentally connected to our perspective on humanity, and way of life.

On July 6th, Tsuru University had a guest from Denmark, the National consultant in Outdoor Education Ms. Tina Noregren, who gave a guest lecture about outdoor education in Denmark. Outdoor education is based on John Dewey's theory, "children should be encouraged to learn through experience, clarify the key points and apply the lessons to get practical result", which means "learning by doing". Playful learning develops children's motivation and creativity. Danish schools are doing the "open school" system, which is cooperation with the people and places outside of the school, and using other professions to teach. Also, their outdoor education is connected to indoor education. I think we need to incorporate this

concept into our education, because our life is not lived inside the school, but outside, and there are many things that we can not learn in the classroom. However, this way of education places greater demands on the teachers. They need to make plans flexible no matter what the weathers will be, or the student's curiosity, and they need to develop their own knowledge of nature and the world outside the classroom. I think there is a big difference between knowing and not knowing, because if you have a lot of knowledge you can come

up with ideas which no one else could ever imagine, and if we could have outdoor education, we can get various kinds of inspiration, which might lead to unique ideas. I learned about this new way of education and how important it is to do outdoor education from this lecture. Also, I had a chance to reconsider my ideas about education and reflect upon my learning experiences. I would like to have this kind of lecture again, and would also like to know more about education in other countries.

(国際教育学科1年 フィセツト 文音)

講師紹介



Tina Noregren

Presentation by Tina Noregren. Ma in Social Education, National school consultant in Outdoor Education. Assistant Professor, University College Zealand, Denmark.

関東甲信越国公立大学バドミントン大会優勝にあたり

国文学科 2年
バドミントン部女子主将 田草川 里沙



こんにちは、バドミントン部です。私たちは現在、男子5名女子5名と少ない人数ではありますが、部員間の仲もよくいい雰囲気です。8月29、30日にかけて行われた関東甲信越大会では、女子が初の団体優勝を収めることができました。バドミントン部は、3年生が男女ともに一人もいないので、女子部では1、2年生のみのメンバー構成で初めての公式戦を戦いました。昨年は予選敗退という結果におわりとても悔しい思いをしたので、今年こそは、絶対に良い成績を残したいと強く思っていました。そして、今年は、優勝常連校の筑波大学が出場してなかったため、優勝を狙えるチャンスでもありました。新体制で、プレッシャーも大きく心が折れそうになる場面もありましたが、決勝では群馬大学に2-1、千葉大学に2-1で勝ち、目標であった優勝を果たすことができました。これからも各種大会で自分たちの目標を達成できるように頑張っていきますので、応援よろしくお願いします。

吹奏楽部が第23回西関東吹奏楽コンクールで銀賞を受賞

初等教育学科 3年
吹奏楽部代表 勝田 日南野

私たち吹奏楽部は9月に行われました第23回西関東吹奏楽コンクールにおいて、山梨県代表として演奏し、銀賞を受賞することができました。

コンクールは様々な曲を演奏する定期演奏会とは異なり、課題曲と自由曲だけに取り組みます。その2曲をいかに自分たちのものにし、良い演奏にするかを大切に練習に励みました。もちろん毎日の活動が上手くいくわけではなく、仲間との衝突や学生の方だけで練習を進めることの難しさ、学生生活との両立の大変さなど、様々な困難がありました。そのような様々な困難を、自分たちの力や周りの方々の支えによって乗り越え、本番では練習の成果を出し切って演奏しました。演奏が終わった後の達成感はとても大きなものでした。来年度は更に良い演奏を目指し練習に励んでいきたいです。

最後になりますが、大会出場にあたりご指導、ご支援くださった講師の先生方、大学職員の皆様、地域の方々、家族、全ての方々に感謝申し上げます。



学生の活動 ～部活・サークル

学生活動

初等教育学科 3年
合唱団代表 中野 美樹

私たち都留文科大学合唱団は11月25日(土)に東京芸術劇場ホールで行われた第70回全日本合唱コンクール全国大会大学ユースの部において、9年連続金賞および文部科学大臣をいただきました。

連続金賞の記録に対するプレッシャーの中、「一位奪還」という目標を達するべく日々の練習に励んで参りました。本番の演奏では、仲間や先生、これまでの練習を信じ、思いを込めた演奏をすることができました。全国の舞台上で演奏できたことは私たちにとって大きな財産となりました。応援してください。これからも「文大サウンド」を追求し、よりよい演奏ができるよう団員一同、精進してまいります。



男子ソフトボール部I部昇格

社会学科 現代社会専攻 3年
男子ソフトボール部主将 秋山 慎治



私たち男子ソフトボール部は、10月8、9、14日に群馬県藤岡市で開催されました第17回関東学生ソフトボール秋季リーグ戦において4勝1敗の成績でⅡ部リーグ優勝を果たし、翌15日に行われました東海大学との入れ替え戦にて7対6で勝利を収め、四年ぶりにⅠ部昇格を果たすことができました。思えばチームはここ数年人数もそろわず、低迷期を迎え、なかなか勝てない時期が続き、二年前にはⅢ部降格も味わいました。しかし、この悔しい思いを胸に各々課題を見つけ、練習に励んでいった結果、昨年にはⅡ部昇格、そして今年はⅠ部昇格と好成績を残せるようになりました。これらの結果は自分たちの努力以外にも、大学関係者の方々やOBの方々の声援があったことなので、周りの方々には感謝の気持ちでいっぱいです。

最後にⅠ部昇格を達成できた私たちですが、これからもⅠ部優勝やインカレ出場といったさらなる高い目標を掲げて活動していくつもりです。これからも男子ソフトボール部の応援をよろしくお願い致します。

第四十四回 鶴鷹祭



6月17日(土)と18日(日)の2日間にわたり、高崎経済大学において『第44回鶴鷹祭(都留文科大学・高崎経済大学総合体育対抗戦)』が開催されました。

鶴鷹祭は平成29年で44回目を数えますが、前回の第43回までは本学の24勝17敗2分けと勝ち越しております。

本学は高崎経済大学の連覇を阻止すべく、対する高崎経済大学は創立60周年の記念すべき年に連覇達成の目標を胸に、両校の学生がお互いの力をぶつけ合いました。2日間にわたり両校の選手たちは接戦を繰り広げ、9(都留)－13(高崎)と残念ながら勝利を納めることはできませんでした。

来年度は舞台を本学に移し、再び勝利を掴み取るため、本学の体育会の部活動に所属する学生たちが対抗戦に挑みます。熱い試合が繰り広げられることを期待します。



各団体による出店▲



中庭でのライブ▲

委員長挨拶(桂川祭を振り返って)



光岡歩里

『PASSION』というテーマのもと、来場された方々に情熱の溢れるような時間を過ごしていただくためさまざまな工夫を凝らした今年度の桂川祭。至らぬ点もございましたが、数々の方々のご協力もあり、老若男女問わず笑顔に包まれるような明るく楽しいものになったのではないかと考えております。ご来場いただいた皆様、ありがとうございました。

11月2日(木)から11月4日(土)までの3日間にわたり、第62回桂川祭を開催いたしました。今年度の桂川祭のテーマは『PASSION』。「桂川祭が明るく楽しいものになるように、そして参加する皆様に情熱が溢れるような時間を過ごしてほしい」という願いを込めたものです。

例年同様、開会式のバルーンリリースで幕を開け、様々な団体の模擬店出店やステージでのパフォーマンスなどで当日の会場はとても賑わいました。また、3日間を通して3号館ホールではしおり作りやヨーヨー釣りなどをはじめとする体験型の企画を複数実施いたしました。小さなお子様でも楽しめるこれらの企画へは、例年同様数多くの方々に足を運んでいただき、あたたかい雰囲気の中実施することができました。

1日目・2日目には昨年度から継続して移動水族館企画と移動動物園企画を実施し、これらの企画へも学内外から数多くのお客様にお越しいただき、年齢問わず楽しんでいただけたものになりました。

最終日には、アーティストのAnlyさん、お笑い芸人の磁石さん・たんぽぽさんをお招きしての芸能人企画を実施し、青空のもと感動と笑顔に包まれるステージになったのではないかと思います。夜には華やかな花火が打ち上げられ、第62回桂川祭は幕を閉じました。

全体を通してルールも守られ、大きな事故や問題もなく、無事に3日間を終えることができました。このような安全で楽しい桂川祭を開催できたのも、多方面で携わっていただいた数多くの方々のご協力のためだと思っております。皆様にとって第62回桂川祭が情熱の溢れるような3日間となっていましたら幸いです。本当にありがとうございました。

吹奏楽部によるオープニング▼



夏の文化祭

夏季オープンキャンパス報告



学科別説明会の様子

2017年度のオープンキャンパスは7月の18～19日に行われました。それぞれの学科については、初日に学校教育学科・地域社会学科（教養学部）、2日目に国文学科、英文学科、比較文化学科のメインのイベントを配置し、国際教育学科は2日間続けて濃い学科紹介を行いました。参加者は全体で2,630名という大きなイベントでした。

やはり一番集客力があるのは各学科の教員による公開講義です。あちこちの教室を覗きましたが、本当にいろいろな学問の最前線に触れることができる、貴重な機会でした。また、在学生引率によるキャンパスツアーも人気でした。授業では伝えきれない文大の魅力を受験生目線で語るというのが効果的だったのだと思います。こうした学生参加のイベン

トは、サークルや学科有志単位でも様々行われるようになってきました。学内あちこちで展示やパフォーマンスが行われており、ちょっとした文化祭のようだなと思いました。

各学科の教員と在学生による個別相談会においても熱心な質問と楽しい会話が飛び交い、盛り上がっていました。親子二代で文大に通いたい、という卒業生ママと娘さんにお会いすることができ、都留文科大学の伝統と今後に明るいものを感じました。

2日間にわたって動いて下さった事務局の皆様、広報委員の先生方、それぞれのイベントにご協力下さった先生方に心よりお礼申し上げます。

（広報委員長 古川裕佳）



部活動紹介の様子



個別相談会の様子

秋季オープンキャンパス報告

本年度で第10回目となる秋季オープンキャンパスを、10月9日（月）から13日（金）までの4日間（水曜日を除く）にわたり開催しました。

主な内容として、公開授業（90分）への参加、個別相談会、学生の案内によるキャンパスツアー、無料学食体験などを実施しました。

参加した高校生の総数は延べ382名と、昨年（378名）と同様に多くの受験生が参加しました。

恒例となったキャンパスツアーでは、本学学生がガイド役となりキャンパス内を案内いたしました。保護者も含む参加者に対し、キャンパス内の施設などをグループで回り、丁寧に説明していました。参加者からは、「実際に

キャンパス内を歩くことで都留文科大学の雰囲気を知ることができた」、「実際に大学に通っている先輩と話ができる貴重な機会だった」等の声が聞かれ非常に好評でした。

また、その他にも「授業が非常に楽しくこの大学に入学したいと思った」、「個別相談で入試について詳しく知ることができた」といった秋季オープンキャンパスに参加して良かったという感想が多く寄せられました。アンケートでは、今回秋季オープンキャンパスに参加した生徒のうち、8割以上が本学の受験を「決めている」「ほぼ決めている」と回答しており、非常に熱心に講義や相談会に参加していただきました。



キャンパスツアーの様子



公開授業の様子



前期修了者卒業式

9月27日（水）、本部棟3階大会議室において、平成29年度前期修了・卒業証書の授与式が執り行われました。

今年は9名の学部卒業者のうち、5名が出席しました。当日は、担当教員をはじめ多くの教職員が見守るなか、福田誠治学長より1人ひとりに卒業証書が授与されました。

その後、学長から卒業生に「送ることば」として激励や祝辞が贈られ、卒業生たちの前途を祝しました。

夏季集中講座

「現職教員教育講座」を開催

本年度も夏季集中講座として、初等教育学科・地域交流研究センター・教職支援センターの共催による「現職教員教育講座」を、7月24日(月)・25日(火)の2日間にわたって開催いたしました。

例年の通り、一人ひとりの子どもを理解することをベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探る「教師の子ども理解と学習指導」をテーマとし、2日間で4講座を開講いたしました。

第1日目は、宮下聡先生(教職支援センター特任教授)の『いじめ指導の方向転換』と春日由香先生(初等教育学科准教授)の『教科に関する研究講座Ⅰー子どもがわかる授業を作る・国語ー』、第2日目は、山崎隆夫先生(教職支援センター特任教授)の『子ども理解と学習指導』と上原明子先生(初等教育学科准教授)の『教科に関する研究講座Ⅱー英語を楽しむ子どもを育てる授業づくりー』を開講いたしました。

本講座は、山梨県教育センターによる「十年経験者研修」の選択講座にも指定されており、都留市内だけでなく県内各地の小中学校及び高等学校より、延べ50名以上の先生方のご参加をいただきました。



教員免許状更新講習

本学では、例年、教員免許状更新講習を開催しております。9年目を迎えた今回は、7月1日から7月29日までの土曜日又は日曜日、計6日間にわたり13講座を開講し、延べ受講者数は356名にのぼりました。

なお、今年度から教育職員免許法施行規則等の一部改正に対応した選択必修領域の講習を3講習に拡大し、開講いたしました。

開講した講座は以下のとおりです。

【必修領域】『教育の最新事情』佐藤隆教授・堤英俊講師

【選択必修領域】『危機管理と組織的な対応を考える』大島英樹立正大学教授、『学校におけるICT活用授業と情報モラル教育』相澤崇准教授、日向良和准教授、杉本光司特任教授、『意味のやりとりを重視した外国語活動の授業づくり』上原明子准教授

【選択領域】:

○小学校教諭向け:『地層と化石の観察』(理科教育)鷹野貴雄非常勤講師・前田誠一郎非常勤講師・小

笠原幸夫特任教授、『主体的、対話的で深い学び』と『国語教室』春日由香准教授、『数と図形の歴史から算数の楽しさを学ぶ』(算数教育)岡野恵司講師、『感性を働かせて描いてみよう!動いてみよう!』(図工体育)【図工】竹下勝雄教授・青木宏希特任教授・布山浩司特任准教授【体育】水口潔教授

○中学校、高等学校教諭向け:『教育ICTで国語科教育をどう変えるか?』(国語分野)野中潤准教授、『Maximizing Motivation in the English Classroom』(英語分野)Hamish Gillies教授・Hywel Evans教授、『ESDの視点から地域の持続可能性を考える』(社会分野)高田研教授

○小学校、中学校、高等学校教諭向け:『子どもたちの心とかかわるために』(教育相談)筒井潤子教授、『学級集団育成の理論とグループアプローチ』(学級経営)品田笑子特任教授

文大名画座を開催

今年度の文大名画座は、第1回を11月3日(金)に1号館1403教室において、第2回を11月14日(火)に2号館2101教室において開催しました。

第1回目は、桂川祭の企画の1つとして開催し、昨年度も名画座で上映した1990年の仏映画、永遠の愛に殉ずる男を描いた「シラノ・ド・ベルジュラック」を、山口博史COC推進機構准教授の解説付きで上映しました。

第2回目は、弁士に片岡一郎氏、ピアノに上屋安由美氏、三味線に宮澤やすみ氏、太鼓に田中まさよし氏をお招きし、大正から昭和にかけて撮影された古いサイレント映画で、苦悩する若者の姿を描いた作品、若き日の坂東妻三郎主演の「逆流」、旅芸人の喜八を主人公に、庶民の生活や人の心の動きを生々しく描きだした「浮草物語」の2本を、ヨハン・ノルドストロム国際教育学科専任講師の解説と共に、上映しました。テレビではめったに見ることのできない生の演奏と弁士による語りの付いた映画が観られるとあって、会場内には地域の方や映画の授業を履修している学生など約



120名の参加者が集まりました。参加者からは、「来て良かったです。私の中で新しい感性というか新たな芸術に触れられた気がしました。呼吸1回1回も場面や人によってこんなにも変化できるのかと感動でした。素晴らしい体験をさせていただきました。」「今回全く知識のない状態で初めてこの形式のものを見ましたが、臨場感が違いました。弁士の方も長い時間同じ調子で語っていてとてもすごいと思いました。」「非常に分かりやすく、素晴らしいかったと思います。今まで触れた事のない事に触れたので、非常に有意義な時間となったし、興味を持ちました。」などの感想が寄せられました。

都留市教育委員会を連携した「子ども公開講座」を夏休みと秋にかけて計5回開催しました。

7月22日(土)は、美術棟において、竹下勝雄教授、青木宏希特任教授、布山浩司特任准教授による「陶レリーフ作り」を開催し、美術専攻の学生たちと共に粘土をこねて、思い思いのデザインのレリーフを作成しました。7月27日(木)は、自然科学棟において、山森美穂准教授による「試験管の中に虹っぽいや雪っぽいのを作ろう」を開催し、理科専攻の学生たちと共にビーカーや



子ども公開講座を開催

ピペットなどの道具を使って、理科の実験の面白さを体験しました。8月5日(土)は、本学図書館において、日向良和准教授による「読書の楽しさを知る」を開催し、iPadのようなタブレットを使った新しい読書の楽しみ方を学びました。8月7日(月)は、3号館ホールにおいて、上原明子准教授による「英語を使って遊ぼう!」を開催し、学生たちと共に体を使った遊びやビンゴゲームなどで楽しく英語を学びました。11月11日(土)は、大学構内及び楽山公園内で、北垣憲仁特任教授による「森の木の実を集めよう!」を開催し、大学内に生えている植物の名前を学びながら、ナツバキやメタセコイヤ、カシやマテバシイのどんぐりなど、秋に拾える木の実を拾いました。

「森の木の実を集めよう!」の様子は、地域交流研究センターのブログで紹介されています。

ノーベル文学賞受賞と イシグロ・フィーバー

英文学科准教授 加藤めぐみ

2017年10月26日、長崎生まれのイギリス人作家カズオ・イシグロのノーベル文学賞が発表されると、わたしのLINEやFacebookに、友人だけでなく元教え子からも「おめでとうございます。ニュースを聞いて一番に先生のことを思い出しました!」といったメッセージが続々と寄せられた。

わたしはいつの間にイシグロへの愛をこれほど多くの人に語っていたのだろう。単にイシグロ文学を愛読し、研究し、授業で講じるだけではない余剰な「イシグロ熱」をどうやら周囲に放ち続けてしまったようだ。

思えばここ数年、わたしはかなりイシグロにハマっていたかもしれない。『わたしを離さないで』の映画が2010年10月東京国際映画祭で日本初公開というときには早朝から六本木の映画館前に並んだし、映画のロケ地、リッチモンドにあるハムハウスも訪れた。2014年11月に東大駒場ではじめてイシグロ国際学

会が行われたときには喜び勇んで研究発表をしたし、2015年6月『忘れられた巨人』の翻訳出版を機にイシグロが来日した際には、慶大での講演会、早川書房主催のイベント、紀伊國屋でのサイン会と連日「おっかけ」をした。またイシグロ作詞の楽曲を歌うステイシー・ケントの生歌を聴きにソーホーのジャズクラブまで足を運び、この春にはイシグロが映画の打ち合わせをしたというロンドン郊外のカフェにも立ち寄った。

そしていま、世界で起きているイシグロ・フィーバーを実は内心、あまり喜んでいない「わたし」がここにいる。イシグロの愛読者が増えるのは嬉しいが、自分が大切にしてきた宝箱が一般公開させられているようで、なんとなく物哀しい。そんな贅沢なジレンマを抱えつつも、これからもイシグロ文学を愛し、その奥行きについて語りつづけていかれたら幸せだなあと思っている。



2015年6月 新宿 紀伊國屋書店にて
カズオ・イシグロ氏(左)と筆者(右)▶

ぶんだい堂



中学生になったら

宮下 聡 著
2017年5月発行
岩波ジュニア新書 900円＋税

◇みやした さとし
教職支援センター 特任教授

現代地方都市の構造再編と 住民生活

一広島県呉市と庄原市を
事例として一
西村雄郎・田中里美・杉本久未子 編
2017年3月発行
ハーベスト社 2,800円＋税

◇たなか さとみ
社会学科 教授



日本型新自由主義とは何か

一占領期改革から
アベノミクスまで一
菊池信輝 著
2016年12月発行
岩波現代全書 2,400円＋税

◇きくち のぶてる
社会学科 准教授

近代日本の偽史言説

一歴史語りのインテリゲンチヤル・
ヒストリー一
前島礼子 他 著
2017年11月発行
勉誠出版 3,800円＋税

◇まえじま れいこ
国際教育学科 講師

